

## 213. 函数方程式 $f(f(x))=F(x)$ 就テ III

南 栗 道 夫 (阪大)

紙上談話會ノ 57 号ヲハ  $f(x)$  が 純増加連続函数ノ場合  
ノミテ 考察シタ。次ニ  $f(x)$  が 純減少連続函数ノ場合ニ 函数  
方程式 ( $f(x)$ ヲ未知函数,  $F(x)$ ヲ既知函数トシテ)

$$(1) f(f(x))=F(x)$$

ヲ 考察シヨウ。何時デモ 純單調連続函数バカリヲ 問題ニスル  
ノハ, ソレガ可逆的一意連続寫像ヲ 典ヘルカラニ 他ナラス,

$F(x)$  の閉区間  $[a, b]$  で純増加でなければならぬ、ハ  
言フマデモナイ。

I.  $f(x)$  が  $[a, b]$  で定義サレタモノトシ、ソノ反復  
 $f(f(x))$  が  $[a, b]$  で意味ヲ有スルタメニハ、 $[a, b]$  で  
$$a \leq f(x) \leq b$$

デなければならぬ。故ニ  $[a, b]$  = 於テ少クトモ一ツ  $f(x)$   
ノ不動点、即チ

$$f(x) = x$$

ナル点ガ存在スル。以上ハ  $f(x)$  が連続ナコトガカラ成立  
スル。特ニ  $f(x)$  が純減小ノ時ニハ、不動点ハ  $[a, b]$  = 只  
一ツ存在シ、ソレハ  $[a, b]$  ノ内部ニアル。ソノ不動点ヲ  $C$   
トスル。

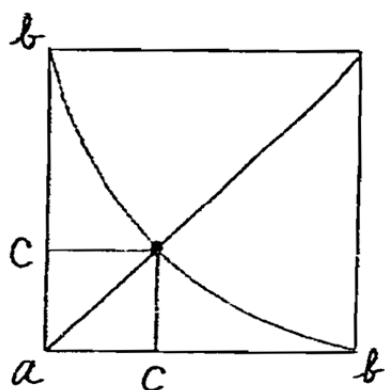
シカラバ

$$a \leq x \leq c \text{ノ時} \quad c \leq f(x) \leq b$$

$$c \leq x \leq b \text{ノ時} \quad a \leq f(x) \leq c$$

[ $C$ ハ勿論  $F(x)$  ノ不動点デアール] 以下  $f(a) = b$ ,  
 $f(b) = a$ . 即チ  $f(x)$  ハ  $[a, b]$  ヲソレ自身ニ可逆的ニ  
寫ス寫像ヲ興ヘルモノト假定スル。此ノ假定ハ強イ假定デア  
ルガ、此ノ假定ノ成立セヌトキニハ、以下ノ議論ハ不動点  $C$   
ノ近傍ニ於テ成立スルモノデアール。(  $f(x)$  が純増加ノ場合  
モ同様)

カクテ  $f(x) = y$  リ、區間  $[a, c]$  ト  $[c, b]$  トハ互ニ  
交換サレル。



今  $J(x)$  ヲバ、ソノぐらふが  
 $y=x$  = 對シテ對稱テ純減小テ  
 $J(a)=b, J(b)=a, J(c)=c$   
 ナル連続函数、即チ  $[a, c]$  = 於  
 テ  $J(x)=J^{-1}(x) \quad J(c)=c$

ナル函数トスル。  $\{J(x) \wedge [a, c] \vee [c, b] \vee \text{ヲ交換スル}\}$

ソコデ  $fJ(x) = f_1(x), \quad Jf(x) = f_2(x)$

$$JFJ(x) = F_1(x)$$

トオケコト=ヨリ、変數ノ區域ヲ全部  $[a, c]$  カテ  $[c, b]$   
 = 変換スレバ、元ノ方程式ハ  $[a, c]$  = 於テ (I) が成立スル  
 カハリ=、

$$[c, b] = \text{於テ } f_2 f_1(x) = F_1(x) \text{ が成立。}$$

又  $[c, b] = \text{於テ (I) が成立スルカハリ=、}$

$$[c, b] = \text{於テ } f_1 f_2(x) = F_2(x) \text{ が成立スル。}$$

カクテ (I) ノ代リ =  $[c, b] = \text{於ケル聯立方程式}$

$$\begin{cases} f_2 f_1(x) = F_1(x) \\ f_1 f_2(x) = F_2(x) \end{cases} \quad [F_2(x) = F_1(x)]$$

ヲ解クコト=ナル。  $\{ [a, c] = \text{於テハ } f(x) = f_1 J(x),$   
 $[c, b] = \text{於テハ } f(x) = J f_2(x) \text{ トオケバ, } [a, b] = \text{於ケ}$   
 $\text{ル } f(x) \text{ ヲ得ル} \}$

II. カクテ我々ハ  $F_1, F_2, f_1, f_2$  ヲ純増加函数トシテ

$$\begin{cases} f_2 f_1 = F_1 \\ f_1 f_2 = F_2 \end{cases}$$

ヲ解クコト = ナツタ。之カラ

$$f_2 = F_1 f_1^{-1} \text{ 及ビ } f_2 = f_1^{-1} F_2$$

ヲ得ル。從ツテ

$$F_1 f_1^{-1} = f_1^{-1} F_2$$

或ハ

$$f_1 F_1 f_1^{-1} = F_2.$$

之レハ 區間  $c \leq x \leq b$ , 及ビ  $c \leq y \leq b$  ヲバ夫々

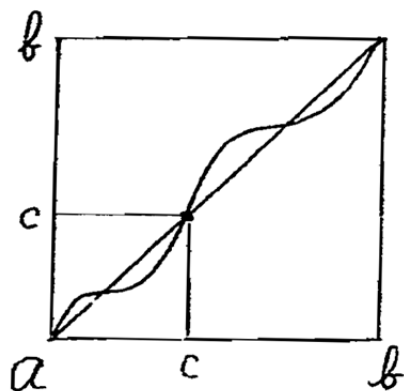
$$x' = f_1(x)$$

$$y' = f_1(y)$$

= ヨツテ 同ジ 區間  $c \leq x' \leq b$ , 及ビ  $c \leq y' \leq b$  = 寫像シ  
タトキ  $y = F_1(x)$  ガ  $y' = F_2(x')$  = 移ルコトヲ示ス。

從ツテ  $F_1(x)$  及ビ  $F_2(x)$  ハ、ソノ 両方ノ 不動点ノ 集合  
ガ 位相幾何學的 = 同型ナルコト 及ビ ソノ 相對應スル 不動点ノ  
間ノ 區間 = 於テ  $F_1(x)$  及ビ  $F_2(x)$  ガ 同時 =  $x$  ヨリ 大 又  
ハ 同時 =  $x$  ヨリ 小ナルコトヲ 必要トスル。 ( $f_1(x)$  ガ 純増  
加ナル = ヨル)

從ツテ 元ノ 函數  $F(x)$  = ツイテハ



$$y = x, \quad y = F(x)$$

ナレバ 圖形ガ  $x = c, y = c$  ナル

点ヲバ 位相幾何學的 = 對稱ノ 中心

トシテ 有スルコトガ 必要デアル。

逆 = 以上ノ 性質ガ アル時 = ハ

$$f_1 F_1 f_1^{-1} = F_2$$

ハ常ニ解カレル。ソレニハ相對應スル不動点ノ間ノ區間  $(\alpha_1, \beta_1)$  及ビ  $(\alpha_2, \beta_2)$  ニ於テ、夫々

$$\varphi_1(t+1) = F_1(\varphi_1(t)) \quad \varphi_1 \in (\alpha_1, \beta_1)$$

$$\varphi_2(t+1) = F_2(\varphi_2(t)) \quad \varphi_2 \in (\alpha_2, \beta_2)$$

ヲ解ケル  $\varphi_2 \varphi_1^{-1}(x) = f_1(x)$  が解デアル。(不動点ニハ  $x' = f_1(x) = \text{ヨリ } F_1(x)$  ノ不動点ガ之ニ對應スル  $F_2(x)$  ノ不動点ニ對應スレバヨイ。)

特ニ  $F(x)$  ノ不動点ガ有限個ノトキニハ、 $C$  ノ兩側ニ於ケル不動点ノ數ガ一致シ、ソノ  $C$  ノ兩側ニ於テ同シ順序ニ相違スル不動点ノ間ノ區間ニハ  $F(x) - x$  ノ符号ガ相反スルコトガ問題ノ方程式ガ解ケルタメニ必要且ツ充分デアル (但シ純減小函数ヲ解トスル時)

### III. 一般ニ

$$f^{\ell}(x) = \underbrace{f f \cdots f}_{\ell}(x) = F(x)$$

テ  $f(x)$  ガ純減小ナル解ヲ求ムルコトハ  $\ell$  ガ偶數ノ場合ニハ容易デアル。何トナレバ  $\ell = 2\ell'$  トシ  $f^2(x) = g(x)$  トオケバ  $g(x)$  ハ純増加デアル。故ニ以前ニ論ツタ方法ニヨツ

$$g^{\ell'}(x) = F(x)$$

ガ解カレル。  $g(x)$  ノ不動点及ビ  $g(x) - x$  ノ符号ハ  $F(x)$  ノ不動点及ビ  $F(x) - x$  ノ符号ト一致スル。カケテ我々ノ問題ハ

$$f f(x) = g(x)$$

ヲ解クコトニ改メラレタ。之ハ本論ニ於テ解決シタモノデア  
ル。在ガ奇數ノ場合ハ未ダ解決ヲ得テナイ。諸君ノ御援助ヲ  
仰ガ次第デアル。

尚ホ最初ノ方法デハ純減少函数ナル解が得ラレヌコトハ  
 $\varphi(t)$  が純單調ナラバ  $\varphi(\varphi(x)^{-1} + \theta)$  ハ必ず純増加ナルニ  
ヨル。

又  $F'(x)$  が純單調ナラバ、 $f(x)$  ニ必ず純單調デナケレバ  
ナラヌコトニ容易ニ分ル。